

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

平成29年11月30日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局 環境安全保健機構附属環境科学センター

職 名 教授

氏 名 酒 井 伸 一

助成の種類	平成29年度 ・ 国際会議開催助成		
国際会議名	第4回Final Sinks国際会議		
開催期間	平成29年10月24日 ～ 平成29年10月27日		
開催場所	京都リサーチパーク		
参加者	総数 150名	内 訳 日本人参加者100名、外国人参加者50名	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> 有(カンファレンスブック)		
会計報告	事業に要した経費総額	8,575,232 円	
	うち当財団からの助成額	1,000,000 円	
	その他の資金の出所	京都らしいMICE開催支援補助制度、小規模MICE開催支援助成金	
	経費の内訳と助成金の使途について		
	費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)
	会場費	2,229,519	500,000
	印刷・制作費	1,405,740	100,000
	参加演題・宿泊Webシステム費	647,833	400,000
	招聘費	74,500	
	レセプション費	1,633,028	
レンタル費	279,890		
人件費	1,080,480		
事務・運用費	1,224,242		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 世界各国の研究者からの京都での国際会議要請は多く届きますが、京都の観光人気は会場費や宿泊費等のコスト上昇につながっており、会議主催者にとっては悩みの種になっているところ。そうした背景から、京都大学教育研究振興財団からの助成は会議主催者にとってありがたい制度です。途上国の研究者支援費用などの確保につながっています。貴財団への希望というよりお礼の言葉として伝えさせていただきます。		

第4回 Final Sinks 国際会議報告

1. 国際会議の名称

物質循環と環境のシンクに関する国際会議（第4回 Final Sinks 国際会議）
4th International Conference on Final Sinks

2. 主催機関の名称および責任者

第4回 Final Sinks 国際会議 会長：酒井伸一（京都大学環境科学センター 教授）
第4回 Final Sinks 国際会議事務局長：矢野順也（京都大学環境科学センター 助教）

3. 開催期日

2017年10月24日(火)–27日(金) 会期4日間

4. 開催場所

京都リサーチパーク

5. 会議の背景と目的

Final Sinks 国際会議はこれまで隔年で開催され、第1回ウィーン（オーストリア）、第2回エスポー（フィンランド）の欧州開催を経て、アジア初開催となる第3回は台北（台湾）で2015年8月に開催された。そして、第4回を2017年10月に京都で開催した。

本国際会議は、持続可能な資源利用・資源循環について、製品・サービスが最終処分に至るまでの動脈・静脈プロセスに裾野を広げることで、物質循環と環境のシンクの視点から、循環型社会形成に資する幅広い知見を集約・議論する会議である。従来の廃棄物分野の国際会議からより一歩視野を広げた議論を展開すること、加えて日本の優れたものづくりや処理・リサイクル技術を世界に向けて情報発信することを期待した。

6. 会議の構成と参加者

第4回 Final Sinks 国際会議は、次の科学分野に関するプログラムを組んだ。

- ・ 物質フロー分析と LCA、Material Flow Analysis and Life Cycle Assessment
- ・ 資源効率に関する指標開発、Indicators Development for Resource Efficiency
- ・ Final Sinks 低減に向けたクリーンサイクル、Clean Cycle to Reduce Final Sinks
- ・ 有害物質削減に向けたクリーンサイクル、Clean Cycle for Hazardous Material Prevention
- ・ 持続可能社会に向けた 3R 展開 I：技術開発、3R Challenges for A Sustainable Society in Asia and Pacific I: Technological Development
- ・ 持続可能社会に向けた 3R 展開 II：ケーススタディ、3R Challenges for A Sustainable Society in Asia and Pacific II: Case Studies

口頭発表 41 件（うち、8 件の特別講演を含む）、ポスター発表 23 件の報告が行われた。参加者は、14 カ国より約 150 名であり、4 日間にわたって研究発表と議論を行った。

7. 本国際会議の意義と今後

欧州でスタートした Final Sinks 国際会議が第 3 回の台湾に続き第 4 回もアジアで開催できたことは意義深い。その理由として、環境保全と経済成長の真の調和が求められる 21 世紀において、クリーンサイクルと環境のシンクに対するアジアの取り組みは始まったばかりであること、そして、アジアが次の経済成長地域として捉えられていること、が挙げられる。

本国際会議では、国内外の物質管理・物質循環に関する最先端の知見を有する欧州・アジアの 8 名の学識者を招聘したキーノートスピーチや関連する様々な分野のセッションを 1 会場に参加者全員が集まり行う形式とした。これにより、熟練の研究者や若手研究者が同じ会場で指標開発、技術開発からケーススタディまで幅広い研究発表についてより深い議論、情報共有を図ることができた。また、テクニカルツアーでは、京都市の再資源化施設、最終処分場を見学し、もったいないの精神に根差した日本の環境分野の高い技術力を披露することができた。

今回は 2019 年に第 1 回開催地でもあるウィーンでの開催が本会議開催中に決定された。第 5 回開催（10 年目）の節目として、Final Sinks の概念の提唱者ウィーン工科大学の Paul H. Brunner 先生や Ulrich Kral 先生らとともに、この 10 年間の物質と環境のシンクに関する学術研究を振り返りつつ、次の展望について議論できることの意義は大きい。